

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版



小説 神楽陽子

挿絵 高浜太郎

第一章	噂の女ディーラー	006
第二章	恥辱の肉宴カジノ	044
第三章	奉仕のスロットマシーン	119
第四章	二万五千枚のメダル	171
第五章	噂のセックスバニー	229

登場人物紹介

Characters



ありすがわ みほ
有栖川 美穂

世界でも一流のトップディーラー。前社長派の筆頭として、イーストメディア社・巨大カジノ場「スリーセブン」を取り仕切る。

かすが よういち
春日 陽一

イーストメディア社・前社長の息子。まだ年齢が満たないため就任することはできないが、次代社長の権利を持つ。

よこやま かずお
横山 和夫

イーストメディア社・現社長。陽一の義理の兄。

ゆっくりと体重をかけていくと、ルーレットの軸は上手い具合に愛液で滑って腔内に潜り込んできた。初めての挿入に対して躊躇と期待を抱いていたが、漏れる吐息は甘ったるい。間もなくズブズブ……と、長さが十五センチはある円筒形の軸が、淫肉に沈んでいった。ルーレットを相手に性感を貪るという、プロのディーラーとしてあるまじき破廉恥な行為に、散々彼女を馬鹿にしていた者でさえ顔を真っ赤にする。

「すげえ、本当に自分から挿れてやがるぞ」

彼らが見守る中、肩を震わせながら少しずつ股間の高度をさげる。美穂にとっては男どもの視線より、初めて知る肉壺の深さのほうが気になった。

（こんなに入るの？ うそ……まだ、入るわ……）

挿入していると、腔がかなり奥まで続いていることがよくわかる。セックスは股間ではなくお腹ですることになり素直に驚く。愛液が潤滑剤になっっているおかげで挿挿はスムーズに終わるかに見えたが、ふいに鋭い痛みが走った。

（こ、これは？ これが……処女膜）

腔の途中で強い抵抗を感じる。処女の証を破ることに戸惑ったが、これ以上脚で全体重を支えていられない。せめて愛する陽一を見つめながら、自ら膜を貫く。

「っんああ！」

美穂でも涙で視界を滲ませるほどの激痛が生じたが、痛みは早くも鋭いものから鈍いも

のに変わった。お腹の中がジンジンする。

「はあ……あ！ は、入った……？」

膜を破れば挿入は完了するものだと思っていたが、まだ半分ほど残っていた。膣がどこまで深いかを確認するように、腰を捻りながらゆっくりと導く。金属製の軸は硬くて冷たく、身体の芯を冷やされるようだったが、熱く煮えたぎった愛蜜が溢れてそれを忘れさせた。挿入が終わるころには痛みよりも圧迫感のほうがずっと強い。

噂の女ディーラーが、ルーレット台に上って秘裂に軸を埋めているのは圧巻だった。客を魅了してやまない巨乳が、脚線美が、その全貌を露わにしている。いつもならタイトに隠れているはずの股間も丸見えで、そこは汗とは別のものでドロドロだった。後ろから見れば、疼く肛門がショーツをへこませている。

「いい格好じゃないか。これならセックスバニーとしても充分やっていけそうだ」

「初めてみたいだな。ディーラーらしい処女喪失だぜ、相手がルーレットなんてな！」

男たちからの軽蔑にも似た視線に晒されることで、美穂はこの変態じみた陵辱が単に女を辱めるためのものではないことを思い知った。いままで現社長派をひとりで圧倒していた名ディーラーのプライドをズタズタにするための、手の込んだ罠。涙を代弁するかのように、処女喪失による鮮血がルーレットの軸を汚す。

「勝負はこれからよ！ く……はあっ」

それでも彼女は屈辱と痛みを耐えて円盤を回そうとしたが、とても脚を動かす気にはなれなかった。無理な体勢のためにいくら足が痺れようとも、これ以上の圧力を秘部にかけたくない。なんとかこのままの姿勢で回転させるべく、背中の側で括られた両腕を捻っていると、それに気づいたらしい和夫や元永が邪な笑みを浮かべて近づいてきた。

「では私たちが回してあげましょう。元永、手伝ってくれ」

「はい。へっへっへ……さあ、まわれ！」

男ふたり分の力を乗せてルーレットが回転する。敏感な秘粘膜を時計回りにかきまわされて、最初はあまりの激痛のために意識が飛びそうになった。

「っあああああ！ や、やめ……んああ！」

——ジュックジュック！ ——ジュックジュック！

物凄い音とともに、剥き身の女陰が愛液を撒き散らす。太腿を少しでも内に寄せて抗おうとするが、円盤の回転を止めなければどうしようもなかった。肉襞のすべてを繰り返して引つ張られては、肉壺の底までくまなく抉られる。快感は炎のように熱く、女ディーラーの肉体を股間からあぶっているかのようにだった。股と頭が直接繋がっているのを、甘い電流によって実感する。

「だめ、止めて！ とめ……っんあ、はあ！」

痛みは弱くじんわりとしたものに変わって、代わりに強烈な快感が何度も脳天を突きあ

げた。自慰とは比べものにならない、肉壺の全面で受ける刺激に加えて、どこよりも敏感なクリトリスを振動するローターで愛撫される。膣の手前を、奥を、手前を、奥を。両方を同時に、乱暴に扱かれる。

「つあん！ はあ、やめて！ だめ、身体が……ああ！」

「おかしくなつまえよ、おらあ！」

元永が繰り返し返し円盤を回すので、回転の速度が落ちることはなかった。ゆらめく火のように、確かな快感がわずかな緩急をつけて肉壺の底を焦がす。痛みが薄れた分だけ甘い刺激を受取る。疲れきった肉体にとって性感は余計に甘く、瞳が蕩けさえた。

（これくらいで……！）

それでも美穂は悦楽に抗って、肛門からボールを放とうとした。なんとか尻に力を込めて球のオレンジ色を露出させる。しかしショットを押しやるだけの力はず、また腸内に戻ってしまった。器用に肛門でボールを出したり引つ込めたりしているさまは、とても一流のディーラーと呼べるものではない。

回転を続けるルーレットの軸をヴァギナに挿し込んで、罵声を浴びながら、それでも変態のように感じてしまう。脚を広げているためにタイトスカートは左右に引つ張られたまままで、いつ破れてもおかしくなかった。背中で組まれた両腕の合間にタキシードが挟まれれば、もう乳房を隠すものはない。巨乳が揺れ弾むたび、華奢な肩で軽い痛みを覚えるが、

意識は股間に向かうばかりでそれどころではなかった。

「はうっ！ はあ、うああ！」

軸が回れば、間接的に腸も捻れて中のボールが動いた。ジワジワと背筋を上ってくる快感で、尻尻をさげ、天井に向けて甘い嬌声を放つ。舌を出していると真紅の髪が絡まったが、それごと唾を飲み込むと、またハアハアと犬のような呼吸を繰り返す。ルーレットを回すはずのディーラーが、ルーレットに肉壺をかきまわされながら、悲鳴に近い声をあげてのたうちまわるのだから、男どもは誰もが大笑いした。

「出すなら出せよ、有栖川は変態か？」

「感じてんだろ。ああやって、ケツの孔を何度も広げているのさ」

ここまで破廉恥な行為を強要されて、しかも侮辱される。ルーレットで散々失敗したからこそ、いまこうして辱められていることに耐えられなかった。いままで積み重ねてきた特訓と実践経験のすべてを、一夜にして覆された思いで、素人のように涙ぐむ。

（こんなの……なにかの、間違いよお……！）

だが、肉壺の底とアナルを貫く二重の快美のせいですぐにも思考は白濁する。

「っあん！ はあ、もう……んあ！ もうだめ、やめ……」

股間の高度をあげれば逃れられるはずなのに、肉体が、回転する軸から子宮口を離してくれない。だんだん精神のほうも性感に翻弄されるようになって、自ら股間に体重を預け

さえする。ボールを放ることも忘れ、鮮血を洗い流すほどの愛液を溢れさせる前の孔にはかり意識を集中させる。

(すごい……こ、これが……アソコの……！)

膣の内部は美穂が思っていた以上に敏感で、このまま続ければ肉体がおかしくなりそうだった。陰核とともに両の乳首も膨らんで、照明の光を浴びて真っ白に照り輝く巨乳をグイグイと引っ張る。上半身を後ろに傾けると、乳房の重みがすべて股間にかかった。まるでリンボーダンスでも踊るかのようにルーレットの上で喘ぐ。

「ひあ！ も、もう……はあ、あん！ あん！ つああん！」

お腹の中でなにかが強烈に疼く。そこから、もう感覚を失いつつある股間肌へと、甘い痺れのようなものが伝わった。長いまつ毛を伏せて呼吸を乱しては、額と頬にべつとりと汗をかきながらも、強烈な性感を少しでも誤魔化すため、顎で首元の蝶ネクタイを押し潰す。色っぽいまなざしでたくさんの男を見下ろしつつ、無意識のうちに股間を上げ下げして、ズツチャズツチャと切れのよい音がするたび、濡れた唇からは嬌声を漏らした。

「ああイク、だめ、こんなの……はあ！ はああ！」

豪快に股を広げて絶頂を迎えるわけにはいかないはずだった。だが、それがどうしていけないのかわからなくなる。エクスタシーへの誘惑はすでに理性を混濁させており、いますぐにでも果ててしまいたい。その様子を、男たちは誰もが食い入るように見ている。

「たまんねえ……また、出したくなってきた」

「我慢しろよ。まだまだ、はあ、これからなんだぜ」

元永が和夫に命令されることなく円盤を回す。

「そろそろいつとくかあ？ さあ、思う存分イッてみる！」

彼は一旦強引にルーレットを止めると、それを逆向きに回転させた。いきなり反時計回りに肉壁を巻き込まれる。肉体が驚いて、脚から力が抜けると、逆回転は子宮口を直撃した。抑えきれない絶頂への高鳴りが全身の脈を速める。

「はあ、イク……私、イっちゃう……！」

さすがの名ディーラーも至高の悦楽には抗えなかった。肛門をキュッと締めて、自ら腰を捻って性感を貪り、ついに臨界点を突破する。

「あ、あああ……っひああああ——！！」

回転する軸のせいで潮が螺旋状にブッシュウと噴き出される。その瞬間、絶頂ならではの快感が業火のように美穂の理性を焼いた。悦びのあまり涙を流したら、そのままブリッジをするかのように背中を弓なりに反らせて咆哮する。

「ああイク、イッてる！ ひあっああ！」

エクスタシーのために肉壺が収縮すると、腸も一緒に締まって、最後のボールを勢いよく盤上に放った。お腹の中から全身が蕩けていくようで、ビクンビクンと熱い脈が巡って



いるのを感じる。名ディーラーはしばらく硬直し、悦楽に染まった瞳でぼんやりと宙を仰いでから、結合を解いて傍に倒れ伏した。

女性器から外れた男根状の突起物はドロドロで、彼女の膣内の事情を物語っていた。拘束されているので両手を動かすことはできないが、いまは疲れ果てて、そもそも乱れた服装を直そうという考えに至らない。舌を持ちあげる力すら残っていない。

「はあ、はあ……はあ……」

やがて目の前でルーレットは止まり、最後の球は「スロット」のマスに落ちた。うつすらと開いた秘裂と肛門は同じ空虚感を訴えたが、劣情は次第に鳴りを潜める。

「はあ……わ、私……?」

陽一以外の男は、まったく品性の感じられない表情で美穂のことを見つめていた。

「ハッハッハ！ 派手にイッたな！」

「やっぱり有栖川はセックスパニーのほうに向いているな。客もきつと大喜びだぞ」

美穂は肌突き刺さる視線で身を焦がす思いだった。なんとかテーブルを下りたところで腕の拘束を解かれたので、早速衣服を整えるが、ルーレットの真上で派手に果てた事実を消すことはできない。

(あ……あんなので……)

いまは和夫たちに対して怒りを抱くよりも、自分の肉体に対して疑心を抱いた。イース

トメディア社が誇る最高のディーラーでありながら、ありえないミスで勝負に敗れ、ディーラーである以前に女性としてあまりに滑稽なさまを晒してしまった。しかも、その様子の一部始終を愛する陽一に見られた。

「陽一様は……こんな女は、お嫌いですよね……？」

すっかり自信をなくした美穂は半ば自暴自棄になり、俯いたままで少年にそんな質問をした。しかし陽一は捕らわれの身でありながら、震える声で元気づけてくれた。

「美穂先生……ボク、美穂先生のが好きだよ。嫌いになんて、ならないから」

その言葉だけが救いで、ようやく彼の顔を直視することができた。表情を緩めて疲れた心を癒す。美穂は、陽一の股間がもつこりと膨らんでいることに気づかない。

ふと、ルーレットのことを思い出す。

（そうだわ、賭けはどうなったの？）

残念ながら、美穂が稼いだ五百枚分の精液は約二百枚分に減ってしまっていた。だが、これで諦めるつもりはない。彼女は今度こそという思いで、次のゲームに挑むべく、男たちの視線は無視して和夫に尋ねた。

「……今度はスロットで勝負、ということかしら？」

和夫が頷いて、一列に並んだスロットを指す。

「ええ、そのとおりです」

次のゲームのテーマでもあるスロットマシンは、いまだフロアの隅で沈黙していた。

「出してやるぞ！ ハア、ハア……う！」

びゅくう！ びゅく、びゅく！ どびゅつ、びゆるるる！

美穂はアナルで絶頂に至り、涎玉より口を大きく開けて咆哮した。

「ひっあう、いぐ……いぐつ、んむあふあああ——！！」

お腹の中に溜まっていた鬱憤のようなものが一気に晴れていく。その一瞬は思考が吹っ飛んで、ピクピクピクピク……と、しつこく汗ばんだ美尻を震わせた。呼吸と一緒に涎の流出が止まった代わりに、煮えたぎった女陰から激しい潮を噴く。

「んあはあああ……！」

悦楽の中、肛門からも潮を放てそうな感覚がした。射精を終えた陰茎を引き抜かれてもオルガスムスは終わらない。無意識に股を開くと、漆黒のパンティが千切れて右足に絡まり、緩みきった肛門からは黄ばんだ汁が漏れた。少し気張れば潮を噴ける——土色の流動物が土砂崩れのように溢れ出す。

ブリュッ！ ブリュ……ブリュブリュ！

汚物は緩急をつけて、まるで男が射精するかのようなリズムで放たれた。絶頂のうえで味わう排泄感あまりに心地よく、涎玉の穴を通過する空気が急に高い音を出す。悦楽に染まった表情は、排泄によって曇ることなく、瞳はむしろさらなる劣情に燃えあがりつつあった。尻で小さな円を描いて、排泄物をソフトクリームのように積みあげる。



「すげえ……クソして、喜んでるぞ」

男たちは誰もが絶句していたが、美穂はまだ漏らしたことに気づいていない。一流のデイナーが、初めて自分で排便できた幼児のような表情を浮かべている。

（お、終わったの……？ 尻の孔が……変だわ……）

絶頂を越えれば、今度はかつてない疲労感に見舞われる。彼女はとうとう美尻をあげてもいられなくなり、股を開いたままその場で突っ伏した。男たちが鼻を押さえながら、カジノ場で排泄したデイナーを次々と非難する。

「ここがどこだと思ってるんだ？ 美穂さんよお！」

「たっぷりと汚いもん出しやがって。これじゃお客が逃げるだろ！」

なんとか半身を起こして振り返ると、美穂にとっても信じられないものが床に広がっていた。真紅の髪も、白い肌も相変わらず美しいのに、あられもない太腿の間には茶色の流動物が広がっている。彼女は真っ青になって石のように硬直した。

（———!?!）

股間で妙な違和感がある。激しいストロークによって孔が緩んで、汚物が漏れてしまったのだった。さっきの悦楽の意外な正体。客にずっともてはやされてきた自分が、デイナーとして以前に人としてあるまじき醜態を晒している。

「い……いひああああ！」

すぐにも排泄物から逃れたいのに、それは肛門に執拗に絡みついた。観衆に汚物同様にみなされているようで、あまりに惨めで、このまま死んでしまいたいとさえ思う。しかも首元の蝶ネクタイで排泄音をばっちり記録してしまった。

(生き恥だわ……ああ、陽一様になんと申しあげれば……)

涎玉を嘔まされたままなので弁解することもできない。恐る恐る顔をあげて格子を覗くと、陽一は気まずそうに目を逸らした。なにかを言おうとはしているが、さすがに脱糞のフォローは仕様がないらしく、重い沈黙が続く。

ふたりの間の静寂を破ったのは、リールの回転する音だった。

カラカラカラ……。

スロットを回すためにアナルセックスに挑んだことを思い出して、高速で回転するリールを見つめる。結局、レバーを調整して絵柄をそろえるどころではなかった。ディーラーでありながら運に任せるしかないことがまた悔しい。左と中央が「7」で止まり、一同が目を見張る中、右のリールは「封鎖」を示すかに見えた。

(そんな！ お願ひ……回って！)

もう辱めは終わりにして欲しい、その一心で、背中側で拘束された両手を合わせて祈る。幸いにもリールはもう少しだけ動いて、なんと「7」が三つそろった。スリーセブンという極めて稀な役に、美穂を含めて一同が驚く中、和夫が彼女を称える。

「素晴らしい！ ケツの孔でスリーセブンを出すとは、さすがですね！」

皮肉を込めた褒め言葉だったが、気にはならなかった。スリーセブンの倍率は五百倍なので、五十枚は二万五千枚となり、これなら目標の五千枚を難なくクリアして陽一を助けることができる。

だが、美穂はとても陽一を真正面から見つめることができなかった。ようやくギャグボールと手錠を外されたが、なにも言葉が浮かんでこない。

「ち、違うんです……陽一様。さっきのは……その……」

なんとか声が出たかと思えば、うるさいほどの拍手に遮られた。

パチパチパチパチパチ！

誰もが下卑た笑みを浮かべながら、脱糞を披露したディーラーを見下している。和夫は数人の男に床の掃除を命じて、自分は汚物で靴を汚さないよう彼女の傍に寄った。

「メダルをお渡しする前に、どうです？ その汚いケツの孔を洗っては」

かつてない屈辱で涙ぐんで、とても顔をあげられない。できるだけ顔は見せず、彼が指すほうにあるドアを確認する。その向こうは小さな更衣室になっており、入浴もできるという話だった。なにかの罠ではないかという懸念もあったが、身体を洗いたい気持ちはあったし、なによりいまは陽一の目から逃れたい。

「……使わせてもらおうわ」

久しぶりに唇を噛み締めて、背中で男たちの下卑た視線を感じながら、衣服を整えることもせず蟹股で歩いていく。

ドアをくぐったところで、美穂は深い溜息をついた。

「お……終わったのね……」

とにかく、これで陵辱は終わった。陽一に合わせる顔をなくしたとはいえ、彼を救うことができる。あとは、蝶ネクタイに仕込んだビデオを証拠にして現社長派を訴えるだけだった。気が抜けたのか、どこかに腰を下ろしたくなる。

地下カジノ場に備えつけられた更衣室は狭かったが、風呂の他にトイレや洗面台もあった。浴槽にはすでにお湯が張られており、もくもくと湯気を立ち上らせている。美穂は部屋の中に監視カメラの類がないのを確認すると、服を脱いでお湯を被った。

(シャワーがないのは残念ね)

尻の汚れだけでなく、汗でベトベトになった全身も気になった。肛門を軽くすすいでから、どっぷりと首までお湯に浸かる。湯加減はちょうどよかったが、普通の風呂とは少し違う感覚がした。

「はあ……な、なにかしら……?」

全身の力が抜けていくような気がする。実は、お湯には睡眠薬が混ざっていたが、その

ことを美穂が知る由もない。

(こんなときだから、よね。さっさと浸かって戻りましょう)

極度の緊張状態が続いたために、お風呂が違うように感じられたのだと解釈する。とはいえ、風呂が心地よいことに変わりはない。たっぷりかいた汗を流すにはちょうどよく、湯加減も良好で甘い溜息が漏れた。

しかし、落ち着いてばかりもいられない。

(陽一様になんと言えばいいのかしら……)

彼の前で脱糞してしまったことを、どうフォローすればいいのだろう。あれだけの醜態を晒したいま、自分にはこれ以上陽一を教育する資格はないとさえ感じた。ずっと積みあげてきたものが一夜にして崩された思いで、風呂の中でうなだれる。

「ん、うん……」

次第に頭の中がぼやけて、睡魔が襲ってきた。

(少し……だけ……)

ウトウトとしているうちに瞼があがらなくなる。美穂は、陵辱の疲れを癒すべく、いまは考えるのをやめて眠りに落ちていった。

第四章 二万五千枚のメダル

次第に四肢の感覚が戻ってくるようだった。まだ臉はあがらないが、仰向けになってい
るらしいことはわかる。

(私……？ 確か、お風呂の中で……)

全身が火照っていたので、まだ風呂の中にいるのかと思った。しかし、それにしても姿
勢が妙で、お湯に浸かっているような感じはしない。

(お風呂……そうだわ！)

美穂はこれまでのことを思い出した。和夫現社長に陽一を人質にされて、セックスバニ
ーの育成に付き合うことになり、陵辱の限りを尽くされたことを。だが、約束通りメダル
を五千枚集めたのだから辱めはもう終わったはず。ディーラーは疲れ果てた身体を起こし
て、少年のもとへ行こうとした。

(陽一様のところへ行かなくて……う？)

ところが、思うように身体を動かせない。手足をなにかで縛られているようで、起きあ
がろうにも起きあがれない。彼女は目を開いて、照明がズラリと並んだ天井を見た。なん
とか顔を左右に向けて、自分が更衣室ではなくカジノ場にいることを知る。

傍では和夫が邪な笑みを浮かべていた。他の男たちも、彼の後ろでニヤついている。

「お目覚めですか？ 美穂さん」

女ディーラーは直径が一メートルほどの円形の台の上に仰向けで、手足をその側面に縛りつける形で寝かされていた。

「こ、これはどういうことよ！ 放しなさい！」

胴を大きなベルトで固定されているのでへそは見えず、両手にも同様の拘束を施されている。脚はM字に広げられたうえで、やはり同じベルトで縛られていた。グローブやハイヒールの感触があつたので、裸ではないようだったが、それにしても胸元にやたらと風が当たる。顎を引いて確認してみると、美乳は丸見えになつていた。

（ちよっと、下着はどこ？）

漆黒のタキシードは袷を外されたままで、紫色のブラはどこにもなかった。桃を並べたような膨らみの重みが肺を圧迫する。天井を向いた先端では、明るいピンク色の蕾が膨張しつつあり、乳輪の円形をはつきりと見て取ることができた。どうして乳首が勃起しているのか美穂にはわからない。

しかも短いタイトは腰までめくらられて、女陰は完全に露出しており、パンティも穿かされていまいようだった。ようやく覚めてきた頭で新たな窮地に陥つたことを知る。

（く、しまったわ……今度はなにをさせるつもりかしら）

これまでの陵辱を思い出すと冷や汗が頬を伝った。だが、美穂は今度の危機をまだ充分に理解していなかった。蝶ネクタイを締め、首に違和感がある。顎で擦ってみても、内蔵されているはずの機械の感触がない。

「……カ……カメラが、ないわ……」

さすがの名ディーラーも青ざめ、瞬きさえ忘れて硬直した。まさか自分は敗北したので、はという予感が脳裏をよぎる。

和夫が小さな機器を見せたとき、その予感は確信に変わった。

「これをお探しですか？ 美穂さん……まったく、あなたは油断のならない人だ」

それは、蝶ネクタイに仕込まれているはずの小型カメラだった。美穂の計算では、これまでの陵辱のすべてがその中に記録されている。

「危ないところでしたよ。あなたは卑怯ですね」

和夫が余裕の笑みを浮かべる一方で、美穂は奥の手を失った。せめて、文句のひとつだけでも返す。

「……卑怯なのはあなたでしょう！」

こうなったらカメラを取り返すしかないが、四肢を拘束されてはどうすることもできない。敗北を実感するほど鼓動が速くなっていく。

ふと、彼女は人質として捕らわれていた少年のことを思い出した。

（——陽一樣！ 陽一樣はどうなったの!?)

カメラを仕込んでいたことを理由に陽一を傷つけられたのではと思ったが、彼は先刻と変わらず、例の鉄格子に捕らわれていた。ところが少年は目を合わそうとはせず、彼女の視線を避けるように俯いた。

「よ、陽一樣……? どうなさったのですか……?」
傍で和夫が囁く。

「ハッハッハ。陽一は、こんなところで脱糞するような女を信じたくはないのですよ」
視界がグラリと傾いた。拘束されていることばかり気にして忘れていた、先の脱糞の感触が生々しく蘇る。排泄という、ディーラーとして以前に人としてあるまじき醜態を晒してしまった以上、弁解のしようもない。

「ち、違うんです……陽一樣、あれは……その」

少年は過激な陵辱の連続を目の当たりにして、すっかり怯えてしまったらしく、美穂が話しかけただけで耳を塞いでうずくまった。いつも胸をキュンとさせてくれた一途な視線を、もう向けてはもらえないのだということを感じする。これからの生きがいとなるはずだった男性に見限られた思いで、しばらく美穂は呆然としていた。

（そんな……私……）

本当は、陽一が彼女に頼っていたのではなく、美穂が彼に頼っていた。少年が格子の向

こうで見守ってくれていたからこそ、いままで陵辱に耐えることができた。そんな力の源を奪われたいま、ディーラーの意志が次第に弱々しくなっていく。

牡の群れが彼女に男根を向けて息を荒くした。

「社長、始めましょうよ！ もう俺、我慢できません」

「ハハハ、いいだろう。始めるとするか！」

カジノ場に雄叫びのような歓声が響く。美穂は顔だけあげて、鬼気迫る思いで和夫に質問した。

「な、なにをするつもりよ……メダルなら、五千枚集めたでしょう！」

「ええ、だからこれからメダルをお渡しするのです……いいですか、あなたは五十枚分の精液を賭けて、倍率が五百倍のスリーセブンを当てた」

美穂には、彼がなにを言おうとしているのか見当がつかない。唾を飲んで彼の次の言葉を待つ。

「ですから、これから美穂さんに、メダルにして二万五千枚分の精液をお渡ししなければなりません」

彼女はヒッと小さな悲鳴をあげたが、それくらいショックだった。真っ青になって歯をカチカチと鳴らす。

「どうしました？ 美穂さん、そろそろ始めますよ」

「な……う、うそでしょ……」

彼らが自分を犯そうとしていることくらい、すぐにわかった。二万五千枚分の精液を与えられるといえ、そうとしか考えられない。狼の群れに囲まれた気分で錯乱もする。

「ちよっと！ 待って、なによ……じ、じゃあこれはなんなの!？」

「ああ、これもルーレットですよ」

円形の台はルーレットで、男どもが精液を出すついでに賭けをして遊ぶためのものだという。彼らのうち数人はズボンを脱ぎ捨てると、ルーレットの周囲にある六つの椅子にそれぞれ腰を下ろした。一本の陰茎が左頬のすぐ傍までやってくる。

「ち、ちよっと……はあ、やめなさいったら」

犯されるといふ恐怖のために、綺麗な声も少し低くなった。なのに、仰向けになつていては見えない秘裂が激しく疼いて、存在を強烈にアピールしてくる。

(どうなっているの？ ア、アソコが……)

ペニスを目の前にして肉体は確かに興奮していた。なにもされずとも愛液を滲ませる身体に、セックスパニーとしての自分を垣間見る。

男たちは普通のメダルを傍に積んで、ディーラーには構わず賭けを始めた。

「俺のところは女の口、これに百枚だ！」

「じゃあ俺は、オマ○コがここにくるっていうのに二百枚賭けるぜ」

どうやら彼らは、これからルーレットを回して、美穂の頭や股間がどこに止まるかを当てるつもりらしい。和夫が直々にルーレット台のボタンを押す。

「では、始めようか。誰が一番稼ぐかなあ？」

美女を乗せた円柱が時計回りにグルグルと回って、湿った髪すら靡なびいた。目を開けていられないので、瞼をきつく閉じて耐える。

「……う、うううう！」

ルーレットの回転に合わせて、頭の中でこれまでのことが巡った。まるで走馬灯のように、一流のディーラーを屈指しての特訓や、陽一との楽しい日々を思い出す。だが、たった一夜にして美穂はディーラーとしてのプライドをズタズタにされ、陽一からの信頼まで失った。そして、これから女としての純潔を奪われつつある。

そんな中、快感だけは美穂を裏切らない。何度も果てた瞬間が鮮明に蘇ってくる。牝の本性を煽るかのように、周りの男たちが回転を続けるルーレットに肉棒を近づけてきた。膝や腕が牡肉と直接ぶつかり、頭にも亀頭が掠る。

「や、やめなさい……たら！」

「ルーレットを止めてやろうとしてんだ、ありがたく思え！」

カーマインの髪はいくつもの雁首を滑り、逆さになった鼻が肉棒を捻じ曲げることもあった。頬や太腿を怒張で叩かれると妙な高揚感が生じる。辱められながらも感じて、蜜を

垂れ流すいやらしい自分の肉体からは、いくら首を振っても逃れられない。回転は止まらず、六本の男根によって四肢の輪郭を繰り返しなぞられる。

「はあつ、だ……だめ、止めて、っんう！」

肌にぶつかっているだけのことなのに、胸が高鳴った。これから犯されると思うだけで肉体はなぜか興奮する。名ディーラーを犯すことを意識してか、男たちのペニスはずでに硬く膨張していた。

「こんな女とやれるなんてな……ああ、いいぜえ」

乾いていた怒張が一斉にカウパー汁を漏らし始める。先汁を分泌するほど亀頭が張りを増し、それだけ摩擦も強烈になった。綺麗な肌に透明の蜜が絡まり、浸透していく。

(なんなの？ この、におい……)

どこか酸っぱい感じのするにおいが何度も嗅覚を突く。鼻と唇の間にもカウパー汁を塗り込まれ、首を捻ったくらいでは悪臭から逃れられず、頭を動かせば余計に陰茎に髪を梳すかれる。

回転の最中、秘裂を貫こうと突っ込んでくるペニスもあつた。

「ちようどいい孔があるじゃねえか、ここで止めてやろうか？」

パンティを穿いていないために剥き出しの女陰を、六本のペニスが右から左へと薙ぎ払う。肉棒が一本ずつ、美女の右膝から内股を通り、割れ目を横切つて左脚のほうへ抜けて



いく。いつ挿入されるかわからない恐怖の中、怒張が陰核のすぐ下を通ったときだけは息を止める。しかし頬にも硬いエラが接触するので、思うように力が入らない。

「ううう……はあ、や、止めて！」

回り続ける円盤と一体になった彼女を見て、和夫が言った。

「ハッハッハ、どうです？ ルーレットになれる、というのも面白いでしょう。アナザーセブンの目玉ですよ！」

和夫の邪悪な笑みが視界に現れては消える。彼に対する憤りが込みあげたが、いまは迫りくる男根にばかり意識が向いた。牡肉で全身をつつかれているうち、これから犯されるという予感が実感となって美穂を困惑させる。

（私……このままでは……）

ペニスまみれになっている自分を思い知らされるうち、ようやく回転が止まったが、剛直は構わず美女の頬や小鼻をくすぐった。

「きゃあああ！ や、やめて……はあつ……」

首を捻って視界から肉棒を除いた瞬間、両脚の付け根にビリッと電流が走る。額に陰莖を載せて顔をあげると、別の男が自分の股間をまさぐっているのが見える。

「へっへっへ……俺からだな、予想のとおり！」

美穂の秘裂は愛撫を待っていたかのように蜜を滴らせた。真紅の恥毛が四枚の陰唇に絡

みつく中、腫れあがった肉芽だけは隠れることなく全貌を露わにしている。その先端を指の腹で押されると、思わず甲高い声を漏らしてしまった。

「はあ！……み、見ないで」

抵抗の言葉に力はない。陰毛をかきあげられて真っ白な地肌を確認されるたび、触られてもいないクリトリスがピクピクと疼いた。酸っぱい牝の香りが辺りに充満する。女陰の下方でも、へこんだ菊門が呼吸でもするかのように拡張と収縮を繰り返した。

（だ、だめ……なんとか、逃げなくちゃ……）

犯されることに対する恐怖はあった。和夫たち現社長派に対するかつてない屈辱の念もあった。なのに、肉体は呼吸もおぼつかなくなるほど興奮して辱めを待っている。苦痛ではなく快楽でこうも弄ばれているにもかかわらず、股は濡れた。乳首は勃った。いつもと同じ制服を着ているだけで、もう身体は変わってしまったのだと実感する。

それでも、カジノ「スリーセブン」の名ディーラーとしては負けられなかった。和夫たちの好きにされてはたまらない。肉体は屈しても、精神は屈さない。

（ま……まだよ！）

今度こそ万策尽きたが、そう念じていなければ、ドス黒い悦楽の渦に呑み込まれそうだった。怒張で陰核を弾かれた瞬間、歯を食いしばって眉を吊りあげる。

「くううう……！」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>